

『教行信証』『行卷』竜樹引文の一考察

伊 藤 唯 道

親鸞は『教行信証』『行卷』において竜樹の『十住毘婆論』を「入初地品」「淨地品」「地相品」「易行品」の四品をかなりの量引用している。この一連の引文で示されるものは、前三品では初地の菩薩のあり方であり、易行品では具体的行法が述べられることになるが、従来この前三品のあり方をあまり重視しなかったように思われる。しかしこの竜樹の引文でその大部分は前三品が占めている。つまりそこには親鸞の明確な意図が込められていると考えられる。そこでこの小論ではこれらの点、つまり前三品に注目し、そこに示される初地の菩薩の意義を明らかにしようとするものである。周知の通りこの引文には、数多く親鸞独自の訓点が施され、また省略もなされている。これらの点に注目し、菩薩の意義について考察を進めていきたい。

まず、この引文中大きな読み替えがなされているのが、次に示す「入初地品」の初地の菩薩の歓喜についての表現である。

一毛をもつて百分となして、一分の毛をもつて大海の水を分ち取るがごときは、二三滯の苦すでに滅せんがごとし。大海の水は余のいまだ滅せざるもののごとし。

ここでは菩薩の歓喜について水滯の譬をもつて示されるのであるが、そこに大きな読み替えが見られる。まず、竜樹の原文では、すでに滅し終わつた苦が大海の水のように多いものであり、未だ滅していない苦が一分の毛からの二三滯の水滴にすぎないと示されるが、『行卷』では全く逆に、滅し終わつた苦が二三滯の水滴の如くであり、未だ滅せざる苦が大海の水の如しであると述べている。つまりこの二者は全く逆の意味になる。しかし同時に、この二文とも歓喜が多いという点においては変わらないのである。この点に関して一般的には他力の行者が、救われていながらも、自信が煩惱に覆われている状態を示したのであると理解するが、岡亮二氏は

竜樹における苦の滅はただ自利のみでとらえられていたのであるが、親鸞においては、そこに利他の面をも見られたことになるか

らである。^②

と解釈され、そこに菩薩の利他性を見ようとされている。つまり、この菩薩の歡喜は、今から始まる菩薩道に対しての歡喜であると示されるのである。このように二つの解釈に分れるのであるが、この解釈によって、ここに示される菩薩のあり方が大きく異なることとなる。そこで、次の地相品の一文に注目したい。

念必定のもろもろの菩薩は、もし菩薩、阿耨多羅三藐三菩提の記を得れば、法位に入り無生忍を得るなり。千万億数の魔の軍衆、壞乱することあたはず。大悲心を得て大人法を成ず。乃至これを念必定の菩薩と名づく。^③

ここは本来偈頌の部分の説明として示される文であるが、親鸞はこれを見出し、一連の文として引用している。「必定の菩薩を念じる^④」と読むべき文を、「念必定のもろもろの菩薩」と読んでいる。つまりこの念は、菩薩が念じるといいうように行為の主体が変わっている。行為の主体が変わることにより、それ以下の文の内容つまり「大悲心を得て大人法を成ず」が、菩薩の相として、衆生を利他するという意味が生じる。また、この文は「これを念必定の菩薩と名づく」と結ぶのであるが、原文では「身命を惜しまず菩提を得るために勤めて精進を行ず。」という一文が存在する。しかし親鸞は「乃至」の文でこの一文を省略している。この省略された一文は、菩薩がみ

ずからのために行う自利の行を示しているといえる。この文の削除により、この菩薩にはすでに自利の面はなく、利他の面を持つていることを示しているのであると窺える。このように考えると先に示した大海の譬の解釈も、岡氏の解釈のように、菩薩の利他性を示すものとして解釈できるのではないだろうか。つまり利他性を有するが故に歡喜が多いと言えるのではないだろうか。

故にここで親鸞の意図したところは、この菩薩にはすでに自利はなく利他のみであると言い得るのではないだろうか。ではこの菩薩とは具体的にいかなる者なのであるうか。この念必定の菩薩について『愚禿鈔』に同様の表現がある。

即得往生は、後念即生なり。「即のとき必定に入る」文また「必定の菩薩と名づくるなり」と。^⑤

さらに下巻には

また、西の岸の上に人ありて喚ばうていはく、ハ汝一心正念にしてただちに來れ、我能く護らん^⑥」といふは、「西の岸の上に人ありて喚ばうていはく」といふは、阿弥陀如来の誓願なり。「汝」の言は行者なり、これすなはち必定の菩薩と名づく。^⑥

と示してあり、ここでは正定聚の行者のことを必定の菩薩と示している。つまりここで示されるのは他力信心の行者と理解しうる。しかし、果たして親鸞が意図したところはそこにあつたのであろうか。次の「淨地品」の一文には

深く大悲を行ずとは、衆生を愍念すること骨体に徹入するがゆゑに名づけて深とす。一切衆生のために仏道を求むるがゆゑに名づけて大とす。慈心はつねに利事を求めて衆生を安穩す。

と、重ねてこの菩薩が衆生を導くさまが示されている。これら一連の引文から明らかのように、この竜樹の引文は菩薩が衆生を導くという関係が明らかにされていると言える。つまり阿弥陀仏が菩薩を導き、またその菩薩が衆生を導くという、阿弥陀仏の大道が衆生に伝わる構造が述べられていると考えなければならない。故に数々の読み替えが必要となったのである。たしかに上に示した『愚禿鈔』から考察すれば、この菩薩は信心の行者の姿ではあるが、その中心問題は、いかに衆生へ法の伝達が行われるかが述べられていると言えるのではない。単に信心の行者の姿が述べられていると解釈する場合、親鸞の意図とは少し方向性がずれてしまうのではないだろうか。

以上のように、この竜樹の引文では、菩薩は阿弥陀仏と衆生の媒介的役割を示しているのだと言える。

- 1 真聖全二一九頁
- 2 岡亮二『教行信証』〔行巻〕の研究二七四頁
- 3 真聖全二一〇頁
- 4 新国訳大蔵経経論部二二九二頁
- 5 真聖全二四六〇

【教行信証】〔行巻〕竜樹引文の一考察（伊藤）

- 6 同四七六頁
- 7 同一一頁

（キーワード） 親鸞、行巻、竜樹引文

（龍谷大学大学院）

新刊紹介

荒牧典俊 著

北朝／随唐 中国仏教思想史

A5判・六〇〇頁・定価一六、五〇〇円
法蔵館・二〇〇〇年二月